編集委員長あいさつ

宮　沢　光　一*

現実世界をモデル化して，その中で考える，という限りにおいてはORも一つの形式論であるのかもしれない．しかもそのモデルがあまりにも皮相的な単純な抽象に終わっているとの批判が多いかもしれない．そうした実態から遊離したモデルのなかで，いかに数学をいじくってみたところで，それはORの名に値しないことはいうまでもない．しかも実際には，そうした数学に粉飾された結果がORの論文としてまかり通ることに，根強い反感の出ていることも事実である．しかし他面，こうした研究をいちがいに排斥してよいものであろうか．そうした研究から生まれる数学的な諸結果が，より妥当なモデルが開発された暁に，それを解決するための有力な基盤を提供する保証がない，と誰がいい切れるであろうか．ORの発展過程においては，こうした研究をも暖かく見守っていく寛容さが必要であろうと思われる．

それでは現実に密着すれば，それで良いORが生まれてくるものであろうか？　現実に固執するのみでは，そこから生まれるものはケース・スタディであり，それはそれなりに興味深いものであるとしても，それがORのすべてでないことも事実であろう．現実問題を解決していく過程を通じて，ある段階では現実を突き離して，一般的な方法論を確立していこうとする態度が肝要なのではなかろうか．現実と抽象のかね合いの微妙なところにORの妙味もあることであろう．

ORのより大きい発展のためには，大規模な，複雑な，有機的な体系そのものを直接的に研究対象とする新しい方法論が開発されなければならないのではなかろうか，システム論的な，サイバネテックス的な考察が強く要求されているように思えてならない．

幸いにして，1975年IFORSがわが国で開催されることになり，世界におけるOR発展の現状を眼のあたりにみることのできるようになったことはまことに喜ばしいことである．世界の趨勢に遅れないようにわが国のORの発展がより強く望まれるこの時期に，本学会誌編集の任を負うことになり，その責任の大きさを痛感している．学会誌をより良くしていく――この意味がまたたいへんなのであるが――ためには，直接的には編集委員・幹事諸氏の，より本源的には会員諸氏全員のご協力を仰がなければならないことである．皆様の率直なご意見を承わりながら，学会誌のいっそうの充実のために努力したいものと願っている．ご支援のほどをお願いするしだいです．

---

* 東京大学経済学部．

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．